

「吉識雅夫の幸運な一面」

吉識 恒夫（雅夫 長男）

・はじめに

吉識雅夫は東京大学教授時代に、「船舶の大型化に関する船体強度の研究」を幅広く行いました。その中で、第2次大戦前の軍艦「大和」などはリベット構造でしたが、船体を溶接構造とし建造効率の向上を目指し、種々研究を重ねました。溶接基礎技術の研究を行う中で、ブロック建造方式とする船体組立て方法を考案しました。後に、その成果が我が国造船業に広く採用され、世界一の造船王国へと導きました。数々の研究段階では、大学などの多くの研究者、業界の多数の技術者と共同で作業を進めました。研究成果が広く活用され、我が国造船業の発展に寄与したことが認められ、文化勲章を授与されました。この栄誉を称え福崎町より名誉市民の称号を与えられ、遺族としても大変名誉な事で、常日頃感謝いたしております。

この度、吉識雅夫生誕100年を

記念して、福崎町では青少年の科学への関心を深める趣旨で「吉識雅夫科学賞」を設置されました。誠に光栄に存じている次第です。この機会に、父に関する思い出を、述べて欲しいとのご要請がありました。どのようなことを記述すればよいか、なかなか思い浮かぶことはありません。職歴は既にご承知の通り、東京大学教授・大学退職後日本学術振興会理事長・宇宙開発委員会委員長代理・東京理科大学長などの要職を、数多く経験させていただきました。それら要職での業績以外の日常生活面などの一部につき、思いつくままに2〜3列挙いたします。

・若い時代の個性

大学教職時代のある振る舞いに触れてみます。大学教授という職業柄、一度筋道を決め行動を起こすと、その決定を簡単に改めないのは当然のことかも知れません。度々自分の主

張を押し通す様子を、多くの方が語っておられます。特に、学生へ接する場合、この厳しい態度を取ることで、学生からかなり恐れられていたようです。大学退職後は、研究・教職と異なる要職に就いたので、自分の意見を強く押し通せる境遇には必ずしもなく、適宜譲歩を認め変化して行ったように思います。この意志強固な態度を示す場合、大声で怒鳴り散らすと言う陽的な態度ではなく、多くを語らず沈黙に近い状態で、眼光鋭く睨みつけると言う態度が多かったようです。単に睨みつけるのではなく、眼鏡のレンズを通して見える眼光の鋭さが、怖さを象徴していました。我々子どもたちには、それ程厳格に言葉に出して叱る事は多くありませんでしたが、睨みつけられるのは度々で、通常と異なる怖さの思い出は多々あります。怒鳴り散らす様な怒り方ではないので、どうしても短時間で気分転換する性格では必ずしもありませんでした。

・飲酒との出会い

通常の日常生活ではさほど気難しいという事はなく、温厚なタイプでアルコールが入ると結構陽気になり、

時には深酒をして酔いつぶれてのご帰還も結構ありました。生まれつきの体質は、どちらかと言えば飲めないタイプであったと、度々聞かされました。飲酒を好むタイプに変わったのは、大学教職の道を選んだことに関係しています。大学教職生活に入り、直接ご指導いただく先生が大変お酒好きで、先生のお供により飲酒機会が増し、徐々に酒量が増加していったようです。お酒の飲み方などさまざまの教訓も多々受け、多くの方々との接し方にも変化が現れ、交流の場が広がったようです。研究面など頑固と思われる性格も徐々に影を潜め、多数の方々からの援助・



協力が得られ易くなり、研究成果にも良い影響を与えたように思われま
す。社会から広く評価を頂いた業績
は、多数の方々の援助・協力がなけ
れば、当然叶えなかったと思います。
ご指導頂く先生との出会いは、人生
に多大な影響があったと言っても過
言ではないようです。

・人生の岐路となった罹患

大学教職の道を究極選択したので
すが、実は本人の本来の希望ではあ
りませんでした。卒業論文作成時期
に「チフス」を患い、長期の病気療
養生活から逃れられなかったことが、
大きな要因です。病気療養中に希望
する造船会社の入社試験があり、受
験の機会を失ったようです。大学を
卒業する前年の1929年（昭和4）
は、現在起きている金融危機と同様



な金融大恐慌時代で、社会は大不況
期にあり、東京帝国大学卒業生でも
大変な就職難の状況にあったよう
です。企業への就職が出来ず困り果
た状況にある時、先に述べた先生か
ら大学での教職の道を進められ採用
頂きました。その結果、学究をはじ
めさまざまな人生教訓を学ばせてい
ただいたことが、運命の大きな分か
れ道であったと度々聞かされました。
この幸運を呼び込んだ運命が、自叙
伝『運鈍根』の表題として選んだ大
きな理由の一つとされています。

本人の身体健康状況は、必ずしも
頑強なタイプではなく、大学卒業時
の大病以外、京都府立二中受験時に
も、原因不明の高熱が続き家族一同
不安があったようです。何とか試験
の一週間前にどうにか起き上がるこ
とが出来、受験に間に合い運良く合
格出来たようです。しかし、2年生
への進級時に父の東京転勤があり、
またまた東京の中学校への編入試験
を受けねばならぬ状況になったよう
です。転校志望先として、東京府立
一中（現東京都立日比谷高校）を第
一志望、第二志望を東京府立五中（現
東京都立小石川高校）とし受験に挑
んだようです。この受験は編入試験
であるので試験日が同日でなく、

第二志望校の試験が先に行われたよ
うです。本人の自己採点結果では合
格は無理と思っていました。運良
く合格が決まり、第二志望校では
あったが入学を決断したようです。

この転校も結果として大変幸運を呼
び込んだと聞かされています。府立
五中は当時新設間もない学校で、新
進気鋭の先生が多く、特に数学・物
理に関する授業の密度が高かったよ
うです。これが後の工学・理学の道
へ進む大きな役割を果たしたよう
です。同級生から4人の工学・理学系
東京大学教授が輩出されたことは、
中学（現中・高校）に於ける教育が
如何に大きな影響を与えるか、この
事実を見れば納得出来ることです。

・野口式整体療法とのめぐり合い

人生経歴に大きな影響を及ぼす進
路の分かれ道で、本人の病気罹患が
大きな影響を与えていることは先に
述べた通りです。決して病弱な身で
はありませんでしたが、社会生活
に入ってから健康面には種々気を
配っていたようです。当時は現在の
ような西欧医学が必ずしも発達した
状況ではなく、薬品類も良薬に恵ま
れて居たとは思えません。どちらか

といえば東洋医学に頼る人が、結構
多かったのではないかと推測します。

西洋医学も当然受けていたと思いま
すが、特異な超能力による治療方法
を持ち合せた「野口晴哉先生」にめ
ぐり合い、療法（治療）を受けるこ
とになったようです。以後長くこの
療法に深い関心を持ち、療法を受け
ると同時に、野口先生の理念治療方
法の発展に協力して居りました。

どの様な境遇・めぐり合わせにより
先生に出会うことが出来たか定では
有りません。「野口晴哉先生の整体
理念」との関わりを、自叙伝『運鈍
根』に「自分の人生を生きてゆく上
での心の持ち方、健康に対する心構
えなどにつき大きな影響を受けた」
と記しております。

野口先生が持ち合せた特異な超能
力を最初に発揮されたのは、192
3年（大正12）に起きた関東大震災
の時です。当時先生は小学校6年生
の12歳でしたが、罹患した患者を多
数救済したことに始まるようです。
これを契機に先生は、医学書の研究
を始め、健康法につき独自に探求し、
1926年（大正15）東京入谷に道
場を開設し、治療・講習会を開始さ
れました。当時、先生の治療方法は
患者の患部と思われる箇所を特異な

超能力により見出し、その箇所を手を触れ、愉気（精神を集中し気を通す）を行うことで患部の治癒に当たられたようです。しかし、先生の本来の健康法理念は、患部の治癒が本来の目的ではなく、人間の生まれつき備えている自然に生きる力を、どのように引出してゆくかにあるようです。自然界の動物は、自らの日常生活の中で自然に生命力をつけ生きてゆきます。しかし、人間は社会の種々な外的要因により、体内に潜んでいる自律治癒力を引き出し難く、健康維持を阻害しているとの考え方です。先生は多数の人々の日常行動の観察、あるいは患部治療経験などにより、人間の体型を幾つかに区分けし体内に潜む自律治癒力の引き出し方法を見出されました。

体内に潜む力の引き出し法につき、講習会などを開催し伝授を開始されました。組織を結成しこの理念を社会に広く伝授すべく、第2次大戦中から戦後にかけて活動を開始されました。先生がこの活動を開始される時点で、『運鈍根』に記した自分の健康に対する心構えの面から、積極的に先生の活動に参加、ご援助することになったようです。先生は独特な観察力により、個人の体型と内部に潜在する自律治癒力との関係を構築されました。しかし、先生の考案された理念に、自分の得意とする工学的な手法を具申し、整体操法の拡張に協力したようです。この体癖別整体操法の確立により、組織を「整体協会」に改名し、1956年（昭和31）文部省の認可を得「社団法人整体協会」が発足しました。発足と同時に全国的な組織展開が行われ、野口先生が会長に就任されました。この組織の発足と共に全国広く、活元会、愉気法講座、整体指導講座などを開き会員が増加して行きました。先生は1976年（昭和51）享年64歳で永眠されました。先生が逝去された後も積極的に整体協会の発展に協力し、1986年（昭和61）から1993年（平成5）逝去するまで整体協会の会長を引受けておりました。整体操法の理念に共鳴し、健康を導く活元運動、愉気操法を日常行っておりましたが、晩年老化が進むにつれ自然の生命力も衰え、糖尿病・パーキンソン病に悩まされました。しかし大学卒業までの罹病を考えますと、整体操法との出会いが、享年85歳の長寿達成に大きな影響があったと思われまます。

・あとがき

生前、自分の人生に最も影響力ある事柄は、大学の教職の道へ進んだことであると度々聞かされました。その概要については前述しましたが、大学の先生のご好意がなければ実現しておりません。しかし、先生のご好意だけでその後の人生、全てうまく行くわけではないと思います。やはり本人の能力と努力の積み重ねがなければ達成できません。東大教授としての職務を果たす能力については、中学時代に数学をはじめとする理系の科目につき努力を重ねた実績によるところが大きいと考えられます。自分が手にした幸運をどの様に活用してゆくかは、すべて自己の能力と努力にあると思います。従って、本人も人生を振り返って、自叙伝を著し表題を『運鈍根』としたものと思います。

